

いしかわの遺跡

No.
53
2017.2.15

現地説明会

— 西任田遺跡、中ノ庄遺跡 —



平成 28 年度から北陸新幹線建設（金沢・敦賀間）にともなう発掘調査が本格的に始まりました。能美市から加賀市までの約 20 km の路線のうち 7 遺跡で発掘調査を実施し、現地説明会を開催しました。

6 月 26 日に実施した能美市の西任田遺跡、中ノ庄遺跡の説明会では 180 人も参加者があり、建物跡や溝跡、出土品などから埋もれてしまった古代の村の姿をイメージされていました。参加者は、考古学ファンばかりでなく地元の方々も多く、発掘調査への関心の高さを実感しました。



出土品の説明

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477

FAX 076-229-3731

E-mail ● mail@ishikawa-maibun.or.jp ホームページ ● 「いしかわの遺跡」で検索 (<http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>)



にしとうだ いせき なかのしょういせき のみし
西任田遺跡、中ノ庄遺跡 (能美市)

能美市西任田町・中庄町・五間堂町・赤井町に広がる遺跡で、北陸新幹線建設に先立って発掘調査を実施しました。二つの遺跡は隣接していることから、一体的に調査を行ったもので、調査区の延長は約 900 m に及びます。

中ノ庄遺跡は、昭和 58 年に発掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代、平安時代の遺構・遺物が見つかっています。今回の調査により両遺跡は弥生時代から鎌倉時代まで長期にわたって営まれた集落遺跡であることがわかりました。

弥生時代後期では周溝をもつ建物や溝を確認し、弥生時代終末期から古墳時代では、溝、土坑などを発掘しました。溝には護岸として杭や矢板が打ち込まれており、底からは銅鏃が出土しました。平安時代から鎌倉時代では、総柱式掘立柱建物、井戸、溝、自然河川、土坑などを確認しています。

主な遺物には、弥生時代の土器、石斧、石鏃、管玉、古墳時代末から平安時代の須恵器、土師器、中世の土師器、珠洲焼、青磁、白磁、砥石、金属製品などがあり、木製品が各時代で出ています。

遺跡が所在する手取川下流域の南側は、鎌倉時代は京都安楽寿院（鳥羽上皇の離宮にあった寺院）の荘園で、郡家荘（板津荘ともいう）と呼ばれていました。西任田町・中庄町・五間堂町は、荘園内にあった「中荘」「任田郷」「五家堂」の地名を受け継いだものとみられ、今回の発掘調査により荘園内の集落の一画が姿を現したものと考えられます。



南側調査区全景 (西から)



周溝をもつ建物 (弥生時代後期)



矢板と杭で護岸された溝 (弥生時代終末期)



掘立柱建物 (平安時代末期)



土坑 (古墳時代)

H28
発掘
調査なかのこういせきののしみしこまつし
中ノ江遺跡〔能美市・小松市〕

中ノ江遺跡は能美市中ノ江町、小松市蛭川町^{びるがわまち}地内に所在する遺跡です。手取川扇状地の西端部に位置しており、東方の丘陵には県内有数の規模を誇る能美古墳群があります。今回の調査は北陸新幹線建設にともなうもので、調査区は延長 1.1 km にも及びます。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代と中世の2時期の集落を確認しました。大半は弥生・古墳時代の集落で、中世の集落は小規模なものでした。集落は微高地上に立地しており、集落間の低地は耕作地とみられます。

弥生時代後期から古墳時代の集落では、掘立柱^{ほったてばしら}建物、井戸^{いど}、土坑^{どこう}、溝などを確認しました。掘立柱建物は2×2間、2×3間の規模が中心で、最も大きなものは3×4間です。遺構の重なりは少なく、集

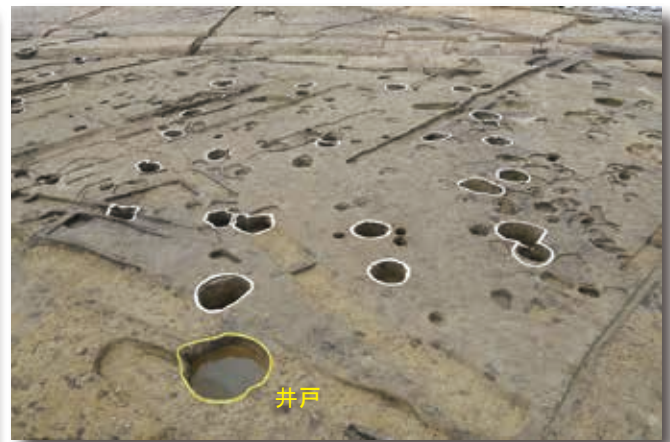
落の存続期間は比較的短いものであったと考えられます。井戸では、^く削り抜いた木材を4枚合わせて側板としたものがあり、丸木船の一部を転用した可能性^があります。溝には、断面が逆台形やV字形を示し直線的に伸びる用水路と考えられるものや、木材を重ね合わせて水流を止める「しがらみ」を設置した水利施設とみられるものもあります。遺物には、弥生土器^{はじき}、土師器^{すえき}、須恵器^{すゑき}のほか、土玉^{どたま}、勾玉^{まがたま}、白玉^{うすだま}、石製模造品^{せきせいもぞうひん}、銅鏃^{どうぞく}などがあります。

中世の遺構は、掘立柱建物、井戸、溝などで、掘立柱建物は2×3間の小規模なものが主体をなしており、井戸は^{まげもの}曲物を側板とするものが目立ちます。

今回の調査により、手取川下流域の南では弥生時代後期から開発が本格化し、古墳時代に盛期を迎えていることがわかりました。



調査区遠景 (南から)



掘立柱建物と井戸 (古墳時代)



甕が出土した井戸 (右上写真の井戸)



側板が残る井戸 (古墳時代)



ようかいちじかたいせき (I・III区) (こまつし)
八日市地方遺跡 (I・III区) (小松市)

八日市地方遺跡は北陸地方を代表する弥生時代中期の大規模な環濠集落で、JR 小松駅東側一帯に位置しています。これまでの調査で、平地式建物や掘立柱建物などの住居域、方形周溝墓を中心とする墓域、そして多重の環濠が見つかっています。

平成 27 年度から北陸新幹線建設に係る発掘調査を開始し、遺跡を南北に縦断するように調査を進めています。本年度は遺跡の北西端 (I 区) と南西端 (III 区) で発掘調査を行いました。

調査の結果、I 区・III 区ともに弥生時代の墓である方形周溝墓が広がっていることがわかりました。方形周溝墓は長さ 4 m 程度の小型墓から、遺跡内の最大規模である 15 m を超える大型墓まで約 30 基を確認しています。また、多くの方形周溝墓が周溝を重複させ連続的に築いている様子や、墓に供えられた土器も確認できました。

方形周溝墓のうち 3 基からは、組合式くみあわせしきの木棺もっかんをもつ埋葬施設まいそうしせつを確認しました。III 区で確認された埋葬施設からは管玉くだたまがみつき、墳丘規模ふんきゅうや副葬品ふくそうひんの違いが階層や社会的な格差を表すものではないかと考えられます。また、溝のなかに土坑どこうを掘りその中に遺骸いがいを安置した方形周溝墓もありました。このほか、土坑の上では赤い顔料がんにょうが検出され、埋葬時に散布されたと考えられます。

このように、遺跡の南北両端が大規模な方形周溝墓群からなる墓域であることを確認できたのは大きな成果と言えます。



I 区全景 (南から)



III 区全景 (北から)



方形周溝墓 (西から)



墓に供えられた土器



方形周溝墓の埋葬施設



第 18 回いしかわの発掘展 「色へのあこがれ -昔人の色彩世界-」



平成 28 年 7 月 15 日から 9 月 4 日、縄文時代から近世にかけての約 240 点の展示品をもとに、色の利用方法や着色技術、色に込められた人々の思いなどをテーマとし、4つのコーナーからなる企画展を開催しました。

「天然色-石の世界-」のコーナーでは、弥生時代の人々が好んだ緑などをモデルに、時代により、利用される石の色や産地に違いがあることを紹介しました。山王丸山遺跡(羽咋郡志賀町)の管玉のネックレスに、子どもたちは興味津々でした。また、金沢城の石垣に使われている戸室石や、縄文人が多

用した黒曜石などに触れてもらい、色以外にも感触や重さを実感してもらいました。

「彩られた焼き物たち」のコーナーでは、赤彩土器に見られる古代以前の赤の世界から、技術やデザインの革新を経て、近世以降の色絵や染付など色の世界が広がる様子を紹介しました。中国から来られた入館者が陶磁器の様々な色の美しさに感心していました。石川県立九谷焼技術研修所のご協力で実現した、九谷焼の色絵付けの工程を示す展示は、わかりやすいと好評でした。「金色への憧れ」コーナーの金の耳環(耳たぶにつける環状の飾り)や、「彩りを求めて」コーナーの青いガラス玉には現代人もひきつけられるようで、子どもも大人も見入っていたのが印象的でした。



夏休みの子どもたち



土器・陶器に見入る親子



ベンガラなどの展示



山王丸山遺跡の管玉



石に触れてみよう



金属製品のコーナー



近世の磁器



九谷焼の色絵付け工程



草木染に見る色の展示



ゴールデンウィーク ^{てがた}「手形・足形づくり」^{あしがた}

平成28年4月28日から5月8日にかけて「手形・足形づくり」を行い、例年の倍近い1,500人もの子供たちの手形・足形が完成しました。未就学児が対象で、子供の成長記録にと毎年参加されるご家族のほか、初めて体験される方も多く、ゴールデンウィークには1日200点を越える手形・足形がつくられ、大いに賑わいました。体験方法は、まず円く整えた粘土板をつくり、

手・足を乗せて形をつけます。そのあと、紐を通すための孔を開け、縄や貝がらを使って文様をつけて完成です。モデルは、北海道や東北地方で出土する縄文時代の「手形・足形付土版」で、吊り下げて子供の健全な成長を願ったのではないかと考えられています。

作品は、当センターで焼き上げ、6月2日から展示・引渡しを行いました。



「手形づくり」もうひと押し



「足形づくり」右足で



ロビーに並んだ手形・足形



手形受け取りました

H28
古代
体験

「人物はにわづくり」

夏休みの人気メニュー「人物はにわづくり」を平成28年7月23日から8月7日までの16日間にわたって行い、合計780体の人物はにわが完成しました。

製作するうえで参考にしたのは、小松市矢田野エジリ古墳から出土した、頭部に「帽子」や「冠」などを付ける人物埴輪です。

今回の製作では、頭部を、①帽子付き・つばなし、②帽子付き・つばあり、③冠付きの3タイプから選択してもらうこととしました。また、従来の帽子・冠がないタイプも製作可能としました。

粘土紐を輪積みにし、頭部に帽子や冠をつける作業は難しいものでしたが、体験者は時間をかけて完成させ、埴輪の製作技術について理解を深めることができました。

はにわは乾燥を終えたあと、古代体験ひろばの復元古窯で8月9日・16日に焼き上げ、同20日より本館ホールで展示・引き渡しを行いました。

引き渡し初日は「まいぶんはにわ(820)の日」として、埴輪にちなんだ展示等を行ったため、ホールは多くの来館者でにぎわいを見せていました。



帽子の文様をつけます



親子で製作



「冠付き」にチャレンジ



完成したはにわ群



古代体験学習講座「藍の原始染め」

古くから植物染料として栽培された藍の生葉を使い、絹の布地を染める古代体験講座を平成28年8月21日(日)に実施しました。

まず縄文時代に始まる染めものの歴史を学び、続いて古代体験農園で藍を摘み取り、染めに必要な染液を作りました。生葉の「絞り染め」では、絹の布地に絞りをかけ、染液となる「藍の青汁」で染めました。「青汁」は緑色で、この染液に漬けた布は、手早く水洗いし乾燥場に干し広げると急速に青みが

強まり、「ジャパンプルー」とも呼ばれる藍色の作品が並びました。

午後は、濡らした布に生葉を置き並べ、上からゴムハンマーで叩く「叩き染め」に挑戦しました。葉の形が文様として布に定着する染め方で、体験者オリジナルの作品が多く出来上がりました。

この原始的な染め方によって作品ごとに濃淡が生まれ、体験者には個性的な作品ができたことと喜んでいただきました。



染めものの歴史を説明



藍の摘み取り



生葉を潰し染液を準備



染液を絞る



生葉を使った「叩き染め」



「絞り染め」の完成



作品の乾燥



親子の体験作品